

ゴッドイーター アン
ソロジーノベル~the
memory of love~

鷹師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ー私はあなたと同じ未来を見てみたいー

この小説はゲーム「ゴッドイーター」のアンソロジーノベルです（パロディです）著作権などの権利はゲーム元の権利に帰属します。あくまで趣味程度の二次創作なのでゴッドイーター2までのネタバレの他史実と違うことが書かれていることがあるかもしれません。ご了承ください

ゴッドイーター2の世界から三年前。アリサの故郷ロシア支部での忘れられない1年間の物語。

大人気神機使いアリサと仲間たちによるアクションSFストーリー。

R15は保険です。性的な描写があるわけではないので期待していた人はごめんなさい。心配していた人は安心してください

なお、星空文庫に同じ題名で上げておりますがログインできないためにこちらに來ました↑

つというわけなのでお楽しみください！

目次

プロローグ

第一章 飛蝗

第二章 結成

第三章 戦雲

第四章 共闘

第五章 悪寒

第六章 極秘

第七章 禁忌

第八章 黒翼

第九章 双生

第十章 新星

第十一章 戦車

1

5

10

14

18

23

26

29

38

41

47

52

第十二章 開幕

第十三章 戯曲

第十四章 転調

第十五章 分岐

第十六章 傷跡

最終章 再見

56

60

64

67

74

83

プロローグ

西暦2050年ごろ人類は突如現れたあらゆるものを捕食する細胞「オラクル細胞」の怪物「アラガミ」によつて滅亡の危機に瀕していた。人類は反撃のために「神機」と呼ばれる生物兵器を開発したがそれを扱えるものは少なく、その少数の神機使いは「ゴッドイーター」と呼ばれた。

そして西暦2075年現在、神機を開発したフェンリルと呼ばれる企業は世界的に支部を展開、アラガミから人々を防衛するシエルターを建設するなど世界に無くてはならない存在となった。島国である旧日本と呼ばれた場所にあるフェンリル極東支部は、強力なアラガミの頻出地帯として有名であるがそれに対抗するため優秀な神機使いを派遣しているので危険性はあるがその中でも比較的安全な場所であった。ロシア支部から転属してきた少女アリサもその優秀な神機使いの一人である。

「アリサ君、ロシア支部が君を呼んでいるんだ。行つてきてくれるかい？」

アリサの前にいる不思議な風体の眼鏡をかけた何を考えているのかわからない男。この男、サカキ博士はこう見えてアラガミ研究者兼極東支部の支部長である。

「え？ロシア支部が？」

アリサは思わず聞き返していた。支部長部屋に呼びつけられたときに何かあるとは思っていたがまさかロシアに飛べとは。

「そうなんだ、新種のアラガミが発生したとかだね。クレイドルの君をじきじきに指名なんだよ」

クレイドルはフェンリル極東支部の独立支援部隊で、名付け親はここにいるサカキ博士。「人と人との繋がりを育むクレイドル（ゆりかご）」となることを願って命名された。私アリサもそこに所属している。

「新種のアラガミというのも実に興味深い、極東はフライアのメンバーもいることだし是非私からもお願いするよ。頼まれてくれるかい？」

フライアというのはフェンリルの直属で動いていた超巨大都市……いわば移動要塞でありそこで起きたクーデター以来フライアに所属していた人たちは極東支部にいる。しかしサカキ博士、新種のアラガミと聞くと本当に嬉しそうな顔をするなく。

「了解です。フライア件からもう1年ですからね。ここはお任せします」
「感謝するよアリサ君。いってらっしゃい」

そんな会話を思い出しながら私はロシアへと向かう航空機の座席に身をゆだねた。今乗っているのはフェンリル特製のジェット機「ファルコム」なんでも昔飛んでいたオ

スプレイという機体を改造したので滑走路は必要なく、空中でアラガミに遭遇してもいいようにアラガミの目をくらます閃光弾を装備し、スナイパーの神機使いも雇ってらしい。同僚のコウタが自慢げに教えてくれたけれども本人は乗ったことがない、羨ましがっていたので写真でも撮ってあげようか。

「まもなく離陸いたします。シートベルトを着用ください」

アナウンスが流れ、周りの乗客がシートベルトをつけ始める。私も周りの人に合わせてシートベルトを締め、窓から外を眺めた。アラガミの侵入を防ぐため周りを高い防壁に囲まれた飛行場の中をゆっくりと機体が動き出し、格納庫から天井がない離陸所へ移動する。移動し終わるとアナウンスでカウントダウンが始まり、0を告げると同時に離陸し始め機体が徐々に上昇を始めた。高い防壁よりも高く上昇すると太陽の光が機体に差し込んだ。広がっているのは荒れ果てた荒野と廃墟となった建物の数々、そこを歩き回るアラガミ。そして……

「あつ……い」

バンドナをまいて全身明るい服を着ている人物がファルコムに向かって親指を立てている、あれはコウタだ。見送りに兼ねて飛行場の防衛をしてきているのだ。その隣では金髪で英国紳士のような服装のハンマー使いエミールが小型の虫型アラガミ「ドレッドバイク」に向かってハンマーを振るっているがいつものように盛大に空降ってい

る。そのアラガミを横から串刺しにしてこっちに笑顔を向けてくる帽子をかぶったスカートの少女スピア使いのエリナもいる。そして遠くでは大きな虎のような姿の大型アラガミ「ヴァジュラ」と戦闘中のフェンリルのメンバーも見える。

見えないだろうが思わず機内で手を振りみんなを応援する。彼らがいれば極東は大丈夫、昔の私なら絶対そんなことを思えなかつたけれども今は信頼できる仲間がいる。ここに来られて、彼らに出会えて本当によかった。私は仲間たちに感謝しつつ窓から顔を離れた。みんなありがとう、いつてきます。たくさんの想いが胸にこみ上げ、思わず背もたれに体を預けて短く息を吐き出す。

ロシアに戻るのは久しぶりだ。確か前に戻ったのは3年前だったかな？初めて……恋をした瞬間でした。

第一章 飛蝗

私は極東支部に入隊後すぐにロシア支部に派遣となった新型神機使いの様子を見に行つて欲しいとサカキ博士に言われてロシア支部に来ていた。大雪の中輸送へりに乗つて来たからさすがに疲れたけれども、何とか無事ロシア支部に到着することができた。

へりから降りるとロシア支部の大きなゲートが開きだし、その中にはロシア支部の人たちが一列に並んで出迎えに来てくれていた。私の姿が見えると一斉に敬礼、そしてその中の一人が口を開いた。

「長い距離わざわざすまん、元気そうで何よりだ」

列の中心にいた分厚いコートを着て、シャープカ（ロシア帽）をかぶつた背の高い男。この人はロシア副支部長だ。

「そんな、お出迎えありがとうございます副支部長。そちらも元気そうですね」

「まだまだ倒れるわけにはいかんよ、ロシア支部のためにもな」

副支部長は30を越えても前線で戦い続けるベテランのゴッドイーターだ。主に現地での指揮を執るがその腕前も凄まじく、一人でサル型の中型アラガミ「コンゴウ」を

仕留めた旧型のスナイパー使いだ。

「最近はおかげで大分楽をさせてもらっているがな。紹介しよう、小早川タカシ君だ」

副支部長は言い終わると右手で隣にいた少年の頭に手を置いた。見た目は長い髪とメガネとロシア支部の簡素なコート、そして……小さい。身長は165センチくらいだろうか？

「小早川タカシですよろしくお願ひします」

一歩前に出てペコリと頭を下げるタカシ君。結構緊張しているようで動きが硬い。

「アリサ・イリーニチナ・アミエーラです。アリサって呼んでくださいね」

こちらも自己紹介を試みるが、彼は一瞬申し訳なさそうな顔をして目をそらしてしまふ。

「こいつはこう見えて人見知りでな、しかし慣れると結構うるさいやつだぞ」

「そ、そんなこと思ってたんですか？」

こうしてみるとまるで親子のような二人のやり取りに思わず笑顔になってしまう。

「ではタカシ君、アリサ君を部屋に案内してやって…」

副支部長は話しながら一瞬、険しい顔で私の後ろを見た直後に叫んだ。

「全員下がれ！アリサ後ろだ！」

言われてとっさに門の中に飛び込みながら後ろを見る。さつきまで私がいた場所に突き刺さっているトゲのような物体、そしてその奥には鬼のような顔の恐竜を思わせる風貌をもった小型アラガミ「オウガテイル」がいた。こいつらは仲間で行動するはず、周囲を見渡し数を確認。合計5匹。

「非戦闘員は門を閉じろ！中には1匹もいれるな！タカシ、援護する行け！」
「了解！」

言うが早いかタカシ君は一番近いオウガテイル1匹に向かって走り出す。副支部長も援護のために門の外へ出たので私も神機を取り出し門の外へ。

「アリサは門が閉まるまで防衛を頼む」

「了解！」

神機を銃形態にして門の前に陣取る。中へは1匹も通さない！私が神機を構えた時、オウガテイルの悲鳴があがった。

とっさにその方向に目をやると、オウガテイル1匹の胴体に深々とタカシ君のショー
トブレードが突き刺さっているのが見えた。まさか私が門の外へ出るこの短時間で彼
は1匹に接近し倒したというのだろうか、なんとという速さだろう。

しかしそこに、左右からオウガテイルが1匹ずつ襲い掛かる。このままでは挟み撃ち
になってしまう。そう思ったのも束の間、右の1匹が大きく後ろに吹っ飛んだ。副支部

長的的確な援護射撃だが左の1匹には間に合わない。しかし彼は焦ることなく、既に仕留めたオウガテイルから素早く剣を引き抜きその場で跳躍、彼がいた場所に襲い掛かるオウガテイル。しかし彼はそこにはいない

「……だあああああああああ！」

声とともに真下に剣を突き立てオウガテイルの頭部を刺し貫いた。その隙に、副支部長が先ほど吹っ飛ばしたオウガテイルに止めの銃弾をお見舞いする。残りのオウガテイルは3匹。

「各個撃破！門に向かつてる奴はアリサ、左のはタカシ、右のは俺がやる！」

「了解！」

副支部長の指示を聞き、自分の敵に集中する。門に迫るオウガテイルの足を狙い第1射、まずは動きを止める。狙った部位に命中しオウガテイルはバランスを崩す。そこにすかさず第2射、3射と頭部を狙って弾丸を撃ち込む。苦しげな呻き声を上げるアラガミに向かつて止めの一撃、神機を捕食モードへ変更。赤い剣の刀身が黒くなり二つに裂ける、その姿はまるで黒い怪物の口のようなだがこれが神機の本来の姿、神機は「生き物」である。そして神機はアラガミを「喰らい」だす。こうしてオウガテイルを文字通り捕食し終わると同時に、

「二人とも……苦勞だった、よくやってくれたな」

副支部長が神機を片手にこちらに近づいてきた。タカシ君も走ってくる。

「すごいですねタカシ君。まだゴッドイーターになって間もないのに」

「こいつは本当に成長が楽しみだ。最近はこのことをクウズイニエーチクなんて呼ぶやつもいるくらいだからな」

クウズイニエーチク……ロシア語でバツタという意味だ。確かにものすごい跳躍力だった。

「バツタといわれても嬉しくないですけどね、えーつと……」

照れ笑いをして彼は少し頭をかいた後口を開いた

「同じ年みたいで……だし、呼び捨てでもいいよ？」

少し恥ずかしそうに、右手を差し出しながら彼はそう言った。

「はい、わかりました。よろしくお願いします」

私は彼の右手を握った。これがタカシ君、いえタカシとの出会いだった。

第二章 結成

声が聞こえる。

男の人と女の人の声。

私を呼んでいるみたい……

突然の大きな音、そして悲鳴。

あたりに広がる錆びた鉄のような臭い、そして飛び散る赤。

何かがこつちに近づいてくる。いや、来ないで……

黒い塊に差し込んでいた光が遮られる。

目の前にあるのは恐ろしい年老いた男の顔。

しかしそれはとても大きく、その口にはお父さんとお母さんだったものが……

「いやああああ!!!」

気がつくくと視界には黒い化け物ではなく、灰色の天井があつた。背中、いや体中にびっしりと汗をかいている。

「夢……か……」

ここ最近見なかった悪夢、小さいころの記憶。

両親とのかくれんぼ中に起きたあの出来事は忘れたくても忘れられない。

ちよつと前まではアラガミへの復讐心でいっぱいだったけれども、ある人が私を助け出して変えてくれた。仲間が

いるって気づかせてくれた。

それからはぜんぜん見なかったのに、やっぱり寂しいのかな？

「アリサ？大丈夫？」

コンコンとドアを叩く音の後にタカシの声が聞こえる。

「大丈夫です。ちよつと悪い夢を見ただけだから」

「そっか、悲鳴が聞こえたからびつくりしちやつたよ。もうすぐミーティングの時間だね、先に行つて待つてるよ」

声だけでも心配されているのがわかる。迷惑をかけるわけにはいかない。

「うん、ありがとう。すぐ行きますね」

できるだけ明るい声で答え、遠ざかる足音を聞いてから私はベッドから起き上がった。

身支度を手早く終えて、ロビーに到着。

全体的に灰色な空間の中心に、大きめの丸いテーブルとそれを囲むように何かの毛皮

でできた湾曲したソフアー

が4つ置いてある。

奥のソフアーは上官用のソフアーであり、少し他のとつくりが違うようだ。右にはタカシ、左にはまるでドレスのように上下が分かれていない奇妙な緑色の服を着た男がまるでおまんじゅうのような奇妙な帽子をかぶつて座っている。見かけは同じ年かそれより下と言ったところか。奥の上官用のソフアーに座るわけにはいかないので

手前のソフアーに腰掛け、ほぼ無意識にタカシを見ると彼は人差し指を立てそれを鼻の前に持つていった。そして視線を左の男へと移すのでつられて私もそちらを見る。

立っていた時には帽子で顔が見えなかったがこの男、目を瞑っているではないか。さらに口の横から一筋のよだれが……

呆れながらも待つこと5分。副支部長がロビーに入ると同時に左の彼が目を覚まし、いよいよミーティングが始まった。

上官用のソフアーに腰掛け副支部長が口を開く。

「諸君、朝からご苦勞。早速だが本題に入る、近年ロシア支部では強力なアラガミが活発に行動しており、より多くの優秀なゴッドイーターが求められている。そこで、優秀な新人を育成するためにここに新たな部隊を結成することとなった。諸君らはそれに参加してもらふことになる。部隊名は「クルイロー」人類の先駆けになる「翼」に君たち

はなるのだ。それでは構成員を紹介する。まずは部隊長、アリサ」

いきなり隊長になるなんて思ってもみなかったので、名前を呼ばれたことに戸惑いつつも返事をする。さらに副支部長の話は続く。

「次、部隊員タカシ。部隊員劉」

緊張気味に返事をするタカシ。そしてその向かいの劉とよばれた彼はゆらりと返事をする。

「そして最後に部隊員イワン。入れ」

すると扉が開き一人の男が入ってくる、顔つきはどこか幼さを残しているがどこか厳しさを感ずる。服装も支給されているコートをかっちりと着こなしている感じだ。しかしこの髪型どこかで……

しかし次の副支部長の一言で私のこのもやもやはすぐに消え去った。

「私の息子だ。タカシは知っているだろう？これによりクルイローは結成する。今日は解散」

これが私が始めて部隊長を務めた部隊だった

第三章 戦雲

副支部長が退室した後、一応みんなで自己紹介をしようという流れになった。

久しぶりのロシア支部での初めての部隊長という大任、ちゃんとみんなをまとめられるのだろうか。

とりあえず私から自己紹介しようと口を開きかけたとき、劉と呼ばれた男が片腕を高々と上げた。

「とりあえず私から自己紹介するアルよ、私の名前は劉大成（りゅうたいせい）アル。美人の隊長さんよろしくアル」

気の抜けるようなゆるーい挨拶とともに劉大成は右腕を前に突き出し拳を作り、左手でその拳を包み込み頭を下げた。

私が不思議そうな顔をしていると劉は自分の国の挨拶だと教えてくれた。

気を取り直して挨拶しないと。

「ありがとうございます、劉さん。私はアリサといいます、初めてでちよつと自信ないですが、よろしくお願いしますね」

「部隊を預かる部隊長がそんなじゃ先が思いやられる……」

その言葉は深く胸へと食い込んだ。声の主はイワン、副支部長のご子息だ。

「イワン！ そんな言い方はないだろう？ 誰にだって始めてはある！ 隊長をサポートするのが俺たちの仕事でもあるだろ！」

私を擁護してくれるタカシの反論にフンと鼻を鳴らし、イワンは再び辛辣な言葉を投げかける。

「早くも隊長に媚を売るか、相変わらず人によつて態度をコロコロと変える奴だ。まるで犬だな。そうやって父にも取り入つたのだろう？」

「貴様ツ……！」

「言い返せないのか？ 凶星だものな、吠えるなら誰にでもできるぞ駄犬」

挑発的なイワンの言動に、タカシは拳を握り締めわなわなと震えている。今にも殴りかかりそうだ。

これでは部隊がバラバラになってしまふ……何とかしなくては……

そのとき、館内放送のブザーが鳴り響いた。私を含め全員がハツとなってスピーカーに注意を向ける。

「北西部雪原地帯にアラガミの反応を確認。独立遊撃部隊クルイローの出撃を要請、目標は中型種の模様。繰り返し……」

幸か不幸かアラガミの襲来で出動要請が出たようだ。気を引き締めて号令をかける。

「クルイロー出動します！ケンカはひとまず置いておくようにしてください！」

「了解、準備してきます」

タカシは納得がいかない様子で唇をかみ締めながら退室した。

「任務に私情は厳禁だ。任務での失敗は許されない」

続いてイワンがブーツをコツコツを鳴らしながら退室。こちらもやはり不機嫌な様子だ。そして：

「私は始めての実戦アル々楽しみアルね」

実はこの人が一番厄介なんじやと思いつつ準備をお願いしますと言いたため息をついた。

各員が準備を整え現地へと到着。崖の上に陣取りオペレーターの確認を待つ。

「解析完了、中型種『コンゴウ』です。他小型種4匹のクローンメイデンを確認。お気を付けて皆さん」

「了解、ミッションを開始します」

まずは素早く頭で作戦を立てる。コンゴウは聴覚に優れた力の強い厄介なサル型のアラガミ、クローンメイデンは

その場で遠距離攻撃を行うアイアンメイデンのようなアラガミだ。コンゴウを相手

にしている最中にコクーン

メイデンの攻撃を避けるのは至難の業、ここはコンゴウを引き離しコクーンメイデンを優先的に撃破が得策。

「遠距離攻撃で私がコンゴウの気を引きます。そのうちにコクーンメイデンを掃討してください」

「了解、撃破次第援護に向かう」

イワンが頷く、私情の色は一切ないようだ。

敵の位置情報は全て把握してあるのでそれぞれの担当を伝える。

「コンタクト次第合図します。それまでここで待機、いいですね?」

「了解」

「了解アルー♪」

劉以外全員の顔が引き締まりいよいよミツシヨンが始まる。

少し雲行きが怪しい、雪が降る可能性があるので早く仕留めよう。

私は神機を握り締め崖を降りた。

第四章 共闘

崖から降りると雪がブーツを優しく包み込んだ。クツシヨンの変わりになって衝撃は和らげるが動くときに足をとられる可能性は充分にありえる。戦場では一瞬の隙が命取りとなる、慎重に行動しなければ。

一足に力を込め近くの瓦礫まで移動し、そこから様子を伺う。ここはコクーンメイデンの死角になっていいるから捕捉はされていないはず、瓦礫は横に長く伸びこのまま移動すれば見つかることなくコンゴウと接触できるはずだ。ただしさっきの移動の足音で聴覚のいいコンゴウには発見されている可能性はある。そつと顔を出してコンゴウを見るがこちらに背を向けているのでどうやらまだ捕捉はされていないようだ、このまま左にいるコクーンメイデンの死角になるように右へと移動しコンゴウに一撃を浴びせる。そのまま右奥へと移動し周りを壁に囲まれた廃墟へ誘導。これでコクーンメイデンとコンゴウを分断できる。

コンゴウが後ろを向いているうちに足音を立てないように移動する。距離が10メートルを切ったところでコンゴウが何かを聞きつけたように頭を高くもたげ様子を伺うが迷わず接近する、ここで私はコンゴウと目があつた。

「コンタクト！」

仲間へ合図と同時にコンゴウへ向けてダツシユ。コンゴウが右腕を振り上げ攻撃のモーションに入るのを確認しつつ神機を剣モードで右横に構え、踏み込みと同時に真一文字に左へ風ぎ、そのまま切り抜ける。すれ違い様にカウンターをもらったコンゴウは盛大に空振りながらもすぐさま振り向き私を追いかける。

遠くで仲間の戦闘音を聞きながら走り、廃墟に到着。コンゴウは不意打ちをくらったことに怒りを覚えたのか私が立ち止まるや否や雄たけびとともに胸を激しく叩く。ゴリラが行ういわゆるドラミングの行為に似ている。

「さあ来なさい！」

気合とともに神機を握りなおし戦闘態勢に入る。

それを感じ取ったのかコンゴウが一際大きく吠え、大きく跳躍した。

押しつぶそうというのだろう、大きな体が上から降ってくるのはかなりの迫力がある。思わず恐怖で動かなくなりそうな体にしっかりと気合を込め、前に飛ぶ。

背後にずしんと重い音が響き渡るのを感じながら反転と共に神機で切り裂く。

「いやあああああああああ！」

まずは真横に一闪、続いて斜めに神機を走らせる。さっきの攻撃で頭から地面に激突したのかコンゴウは頭を抱えてうずくまっている。ここは一気に畳み掛ける！

「グオオオオオ！」

コンゴウの苦しげな声が響き渡る中、コンゴウを切り続ける。

(これなら倒せる！)

そう思ったのも束の間、突如コンゴウが大きく腕をなぎ払うように動かす。攻撃に夢中になっていた私はコンゴウの動作をよく見ていなかった。

コンゴウの丸太のような太い腕が私の腹部に食い込む。

「っっ！」

肺の中の空気が全て口から出てしまうような衝撃を受け、私の体はたまらず背後に吹っ飛ばされ背中が壁に打ち付けられる。

「がっ！あつ……」

起き上がらないとコンゴウがこっちに向かって走ってきている。

このままでは……死……

そのとき、爆音と共にコンゴウが横に吹き飛ばされた。

土ぼこりが舞う中声だけが響き渡る。その声が絶望の中の私を現実引き戻した。

「ナイス劉！」

「今度はちゃんと当たったアル！」

「普段からこうでなくては困るな」

煙が晴れ、三人の背中が見える。隊長の私がかここで寝てるわけにはいかない。

「ぐっ……！」

体中の痛みが私を動かすまいと突き刺さる。負けるものか、私は神機を杖代わりにして渾身の力を込めて起き上がる。

「アリサ、大丈夫か？」

顔だけ振り向きながらタカシが気遣ってくれる。

「隊長ともあろうものが無様な……しかし、そのダメージで起き上がったことは評価する」

前半の辛辣な言葉は胸をえぐるが、少しは認められたようだ。

「おおー隊長！ 私射撃あたるようになったアルよー」

あなたはなんでそんなに元気なんですかドン引きです。

体制を整え神機を構えるとコンゴウが起き上がってくるのが見えた。

「劉さん撃ってください」

劉が銃を撃つと同時にタカシとイワンが左右に散開し、挟み込むようにコンゴウへ駆け寄る。劉の弾はあさつての方向へ飛んで行くがコンゴウの気がそれた。タカシとイワンの剣がコンゴウの足を切り裂く。

「グオオ!？」

バランスを崩し、コンゴウがうつぶせに倒れる。弱点の頭をむき出しにして——
「たああああああ！」

既に間合いはつめていた。むき出しになった弱点のその頭目掛けて刃を突き立てる。弱点を攻撃されたコンゴウは怒り狂ったように腕を振り回して暴れる。その腕にイワンとタカシが剣を突き立てる。

「このオーっ！」

渾身の力を込めて刃を押し込む。すると一際大きく仰け反ったコンゴウは糸が切れ、たようにその場で動かなくなつた。全員がげえげえと肩で息をしているところにオペレーターからの通信が入つた。

「目標アラガミの反応消失。ミッション達成お疲れ様でした」

第五章 悪寒

「アリサさん、お食事はいかがですか？」

名前を呼ばれたことで目を覚ます。目の前にいるのはコンゴウ……ではなく乗組員の一人の男だ。どうやらファルコム機の機内で眠り込んでいたらしい。

「ありがとう、機内食が出るなんて嬉しいですよ」

「貴重な眠りを妨げてしまいましたね。食事と言っても乾パンのようなものですが」

男は手にある栄養補給用のバランス栄養食を差し出した。私はそれを受け取る。

「助かります、機内にいるだけでも体力を使いますから」

「お疲れ様です、間もなくロシア領に入りますのでもう少しの辛抱を。他にも何かあれば気軽に言ってください。ゴッドイーターの貴女を無事に送り届けることが私たちの任務ですから」

そういうと男は一礼し、自分の席へと戻っていった。それを見届けてから食事の袋を開ける。

ブロッコ菓子のようなだがさまざまな種類の味があり、男が渡してくれたのは偶然にも私の好きなフルーツ味。意外と柔らかく食べやすいこの栄養食を口にしながら少し幸

せな気分になりつつ見ていた夢を思い出す。

あの任務の後も私たちクルイローはたびたび任務に参加しアラガミを倒していったが、タカシとイワンの仲はどこかギクシヤクしているもののお互いの力は認めたとやうでうまくやっているとまでは言えないものの何とか部隊としてまとまりは出てきた。

私自身もようやく隊員の性格をつかめてきた。劉はマイペースで射撃が当たらないことを気にせずとにかく撃ちまくる。逆にイワンは几帳面でどうやら父親にコンプレックスを感じているようだ。そしてなんでも正確にやりたがる完璧主義。もちろん射撃は正確なので狙撃はイワン、攪乱や陽動などは当たればラッキーな劉に任せている。そしていろんな面で支えてくれるタカシ。彼は跳躍力を生かした戦い方が得意で、近接戦闘では隊の中でもずば抜けている。反面射撃はあまり得意なようではなく劉とイワンの中間あたり。正直射撃は私のほうが上手である自信がある。

近接戦闘についてもう一つ、それは劉だ。彼は近づいてきたアラガミを一刀のもとに切り捨てる実力者で、いくら小型のアラガミといえどもバスターソードで真つ二つにするのはかなりの鍛錬がいる。たとえ私やイワンでも無駄なくアラガミを切り捨てる劉には近接戦闘では劉に劣っていると考えている。そして切り捨てた時の劉の目……その時の鋭い目が私は忘れられない。

こんな個性的な隊員たちと任務をこなすために作戦を考えるのだけどこれがまた一

苦勞であり楽しい部分。私一人では行き詰りそうになりそうな時も多々ある中隊員が様々なサポートをしてくれる。イワンは合理的、タカシは奇襲戦をよく知っていて、劉はソンシ?の兵法というので助けてくれる。

こうやってみんなで作戦を立てることによって三カ月で八十体という破竹の勢いでミツシヨンをこなしてきた。

そして記念すべき百ミツシヨン目、私たちは大きな試練を迎えることになる。

第六章 極秘

「カルト教団ですか……」

ミツシヨンの内容を聞いたとき耳を疑った。今回のミツシヨンはアラガミを神として信仰するカルト教団のアジトへ潜入し、あまりの力により接触することも禁忌とされている第二種接触禁忌アラガミ「アイテール」を倒せというものだ。

「そうだ、ターゲットはカルト教団の最深部にて崇められている」

いつになく真剣な眼差しの副支部長が話を続ける。私たちクルイローは副支部長室にて説明を受けているが今回のミツシヨンは秘密裏に行われる極秘ミツシヨン。人目につくところでこの話はできない。

死地へ赴く恐怖や責任が肺を握りつぶし呼吸すら満足にできない。握り締めた手のひらはじつとりと汗ばんでいる。

それほどの緊張感が部屋を埋め尽くしている。

「なぜそれほどのアラガミが教団の最深部でおとなしくしているんですか？」

口を開いたのはタカシ。確かに私も気になった理由だがおそらく……

「信じがたい話だが……教団は捕食されることを『救済』だと思っているのだ。今回確認

できた彼らの拠点は世界でも三本の指にはいる規模で人数もおよそ一つの国として成り立つほどだ……一日数人が捕食されている」

わかっていた答えであつても奥歯を食いしぼる。怒り、悲しみ、様々な感情が拳を振るわせる。

「彼らが望もうと望むまいとアラガミは人類の敵。我々は倒さねばならん。教団を食い尽くしたアイテールは必ずや餌を求め世界を食い尽くす。そのようなことは断じてしません！表で別働隊が教団をひきつけ、その間にターゲットを仕留める。この任務には私も参加する」

そうだ、私たちはやらねばならない。神機使いに、ゴッドイーターになったのはアラガミを掃討するため。

「了……」

「くだらん、俺は下ろさせてもらおう」

解という言葉はイワンにかき消されその場にいる全員が息を呑む

「な、なにをバカな……」

「失礼する」

静止しようとしたタカシを遮り、イワンは踵を返して退室していった。あまりにも突然なその出来事に部屋に沈黙が流れる。

「あいつの処分は後々下す……もともと討伐隊はクルイローと私という予定だったのだ、今までのようにやればいい。任務開始まで十二時間……諸君らは自室で待機」

副支部長は椅子を回転させ私たちに背を向けると呟く様に口にした。私にはその姿が副支部長としてではなく父親として移って見えた。

「……了解です」

部隊長として動けなかった私はようやくその言葉だけを告げ部屋を後にした。

今夜は新月……今は空高く輝く太陽も、任務の時間になれば黒一色で塗りつぶされる。闇にまぎれて任務をこなす——私のせいで傷つけてしまったあの人もこの不安や恐怖に耐えていたのだらうか、どんなに辛くても笑顔で励ましてくれたあの人は……

「リンドウさん……」

一陣の風が吹き小さな花びらが空に舞い上がった。

第七章 禁忌

闇にまぎれて動く影が四つ、アラガミを信仰するカルト教団の拠点に忍び寄っていた。

硬く閉ざされた門が四方に存在し、高い城壁によつて来るものすべてを拒絶しているようにも見える。まるで要塞のように……

威圧感を発するそれは夜の静寂に包まれていながら不気味な気配を漂わせていた。

一つの門につき二人の人影が確認できる。遠目からではあるがおそらく銃も携帯しているようだ。気づかれないようにナイトスコープを覗きながら観察を続ける。電力が貴重なためだろうか、かがり火もちらほら見える。この寒い中門を守る門番に頭を下げたくなる。

観察をやめて隣の副支部長を見る。副支部長は頷くと端末を取り出し、操作した次の瞬間……

赤く輝く流れ星が北の門に落ち、次に轟音。驚くのもつかの間、副支部長の支持で一番近くの西の門へ走り出す。

北の門は周りの壁と共に大きく口を開け、その空は赤く染まっている。私はようやく

気がついた。北の門へ落ちたのは流れ星などではなく、ミサイルであったと……

被害は大規模で、他の門にいる人も北の門へ走っていく。このような被害が計画だったのだろうか？と疑問の視線を先を走る副支部長に投げかける。すると。

「あの馬鹿者……やりすぎだ」

……どうやら予想外の出来事だったようだ。

混乱に乗じて門の内側に潜入成功、まずは着ていた黒のコートを脱ぎ捨てる。

中に着ていたなるべく目立たないようににした私服。そして神機を隠すために楽器ケースを改造したトランクを担ぐとよほど注意してみない限り私たちは放浪のミュージシャンに見えるはずだ。

「いくぞ、遅れるな」

「了解です」

副支部長を先頭に怪しまれないよう、それでいて素早く移動を開始する。道中では阿鼻叫喚が聞こえてくる。

——火災だ！火を消せ！

——敵襲なのか!? いったい何者なんだ？

——空に戦闘機が見えるぞ！きつとあいつだ！

——おお、どうか神のご加護を……

内部はかなり混乱しており、人々の声が聞かずとも入ってくる。ここまでやってしまった。必ず成功させなければ無用の戦争を引き起こす引き金になる。そんな不安を抱えながらついに中心部の巨大な建造物に到着した。情報によればこの地下にターゲット……第二種接触禁忌アラガミ「アイテール」がいるはずだが、幸いにも無人のようなので速やかに進入。人々をたいらげる黒い獣のようなものが描かれた不気味な壁画を横目に、下へと続く階段を走り出す。

「いやあく悪趣味アル」

「同感、嫌な空気だしね」

「二人とも気を引き締めろ、近いぞ」

副支部長の言うとおり雰囲気が変わった、その圧力からターゲットが近いのだと全感覚が知らせてくる。

一番下にある扉を蹴破るように開くと奴はそこにいた。開けた空間の中央に少し段になったその頂上に浮いている。そこは祭壇なのだろうか、周りで松明が燃えているのが異様な雰囲気をかもし出している。

容姿は少し大きな人型。まるで日輪のオブジェのような頭に、老人の顔。細い体から生える貴婦人のようにフリルのついた腕と背中にある神々しく禍々しい翼のような衣

の部分が存在感を引き立てる。スカートの様な腰部から鋭くどがった足が伸びている。

（へ、変態アル……）

（こいつがアイテール……なんて禍々しいんだろう……）

二人の顔にはそう書いてあり、口にしなくても伝わってくるようだ。それにしてもすごい迫力……

「劉、タカシ、アリサ、皆口にした言葉はあるだろう。だがそれはひとまず置いておけ。これが終わったらたつぷり聞いてやる。さあ！いくぞー！」

副支部長の号令にそれぞれがトランクから神機を取り出し臨戦態勢をとる。こちらの空気を察したのかふわりと浮いていたアイテールは大きく衣を開く。そして頭部が光った気がした……

次の瞬間私たちがいた地面は爆発したかのように弾けとび、そこにいた私たちは避ける間もなく吹き飛ばされる。

「っー！」

受身を取り、周りを見渡す。全員無事だがいち早く復帰したタカシがアイテールに向かって走り出している。

「私はタカシの援護をする！」

アイテールの気をそらすように頭部に向けて副支部長が狙撃を始める。視界の端で

は劉が瓦礫を跳ね除けてゆらりと立ち上がる。

「今回は私も前に出る……！」

さっきの攻撃で劉のスイッチが入ってしまったらしい。鋭く研ぎ澄まされた殺気を放ちながらアイテールに向けて駆け出していく。

「私は支援射撃および回復に回ります」

私は神機を銃形態に変形させてバレットを装填。私のアサルトは中距離でもつとも効果を発揮するためアイテールへの距離をつめる。そのアイテールはくるくると回りながら近づくとタカシを牽制している。よく見るとアイテールのいたところには光る球体が浮かんでいる。

「タカシ・アイテールが生み出す球体に注意を！」

「了……」

言葉を切り、突如タカシが膝をついた。その瞬間、球体がレーザーとなりタカシへ一直線に襲い掛かる。ここからでは間に合わない！アイテールがニヤリと笑った気がした……

「詰めが甘い」

間一髪、レーザーを掠めるようにして劉がタカシを脇に抱えその場から回避。私のそばにタカシを下ろす。よく見るとタカシは苦しそうな息遣いをしている。

「奴のリンポンからは毒が感じられる……」

そう呟くと劉はアイテールの気をそらすため私たちから遠ざかるように大きく円を描くように走り出す。アイテールは劉を見つけていたが常に頭部を攻撃する副部長を鬱陶しく思ったのか副支部長の方に向き直ると、頭部がまた発光。副支部長のいた地面が爆発し副支部長は大きく吹き飛ばされる。その隙に劉がバスターソードを振り下ろしアイテールの脚を攻撃するが向き直ったアイテールの突進を受けて吹き飛んでしまう。

(このままでは不利……)

私はタカシを少しはなれた場所まで移動させ解毒効果のあるアンプル、さらに回復薬をタカシに注入すると戦線に復帰するべくアイテールを射程距離に捕らえる。

すでに副支部長、劉共に肩で息をするボロボロの状態で、副支部長は方膝をついていたが私の姿を確認するとうつぶせに倒れこんでしまった。アイテールのほうは頭部、脚部の損壊が激しい。オラクル細胞は無限に再生し続ける細胞だが神機によつてその再生を断ち切ることができる。結合崩壊——そう呼ばれているがアイテールの頭部と脚部は結合崩壊しているようだ。

「二人ともお待たせしました」

アイテールをキツと睨み付けその頭部に前進しながら連射開始、バレットが尽きるま

で撃ちきる。リチャージに入ると神機を剣形態へこちらを認識したアイテールは突進を開始する。

(すれ違いざまに一太刀!)

剣を水平に構えて待つが、それを察したかのようにアイテールがジグザグと蛇行しながらこちらに接近。これではタイミングが合わせづらい!

「私を何度無視する」

私と接触する瞬間、横から入ってきた劉によつてなぎ払うようにバスターソードがアイテールに叩き付けられ、意表を疲れたアイテールは横に吹き飛ばされる。

「今だ隊長」

「イヤアアアアアッ!」

ダウンするアイテールにこれでもかとおと劉と共に刃を振り下ろす。恐らく体力的にも劉はこれで限界、私だけではこいつは倒せない。

——倒れろ!

——倒れろ!!

——倒れろ!!!

腕が悲鳴を上げるが切り続ける。そして遂に……

アイテールは大きくのけぞり動かなくなった。私は劉とアイコンタクトを交わすと

劉はいつものように柔らかな顔に戻っていた。

「さあ、副支部長の手当てをするアル」

「あなたも必要ですよ」

私たちはアイテールから離れたところに倒れてしまった副支部長の元に走りよる。

そう油断。それが背後で感じる強大な気配に気づくことを遅らせた。

地面に移る大きな影、情景反射で劉と振り返る。

アイテールが壊れかけの体で浮いている……その体の回りには今まさにレーザーを放たんとする球体が漂っている。

勝利の確信を得たかのようにアイテールが腕を前に出すと共にレーザーが放たれる。

すべてがスローモーションに見えた。

それでも体は動かなかった。

それでも私は、私の目だけは視界の端からレーザーよりも早く動く物体を捕らえていた。

黒い翼。しかしその翼の先は人の手のひらのようになっているこの翼の形……

人型アラガミ「シユウ」

その黒い翼はその硬い翼を丸めてレーザーをすべて防ぎきるとゆっくり振り返る。

「なん……で……」

黒い翼の持ち主はシユウでなく「タカシ」だった。

第八章 黒翼

毒と疲労からか劉がついに膝をつく、それだけじゃないかもしれない。私たちは死んでいたのかもしれない。それを助けてくれたのは間違いなく目の前にいる彼、それなのに。

口を開いても言葉が出てこない……

なんで? どうして? どうやって? どうなってる?

疑問ばかりがぐるぐると頭の中で渦巻いていく。フオローしようにも思いつかない。きつと私の顔は恐怖や困惑の表情を浮かべていたのだろう、しばらくやさしい表情で私を見つめていたタカシはフツ諦めたような顔で笑うとアイテールに向き直る。

大きくその場で一回翼を羽ばたかせると、タカシは弾丸のようにアイテールめがけて突っ込む。早すぎて防ぐ暇もなかったのだろう、アイテールはタカシの体当たりの直撃を受ける。

しかしそれだけでは終わらない、タカシはアイテールの腹部に神機を深々と突き立て、左手でアイテールとがっしりと掴むと推力を横から上へと変えていく。アイテールはもがくが力はまったく緩むことなくスピードは上がっていき天井にアイテールはそ

の体をたたきつけられた。

アラガミ対アラガミという次元の違う戦いに腰が抜け、その場にへたり込む。

ただただ目の前で起こっていることが信じられなかった。

右、左、下、上壁という壁にアイテールはたたきつけられボロボロになっていく。もう抵抗する力も残っていないように千切れそうな右腕が見えていて痛々しい。

土ぼこりが舞い、辺りを埋め尽くしていく。視界を覆う煙の中で、翼が空を切る音と衝撃音、そして苦しそうなアイテールの声だけが鳴り響く。

しかしその音も次第に減っていき、アイテールの声が聞こえなくなる……

そして凄まじい戦いの証拠であった土煙が舞台を最後まで見届けた観客のように引いていくと、残ったのは崩れた祭壇というステージに体を埋めて動かないアイテールとそのそばに立ち今まさに神機で捕食しようとするタカシの姿のみであった。

「大丈夫？お疲れ様」

「今日もうまくいってよかった」

「さあ、帰ろうアリサ」

ミッションが終わるとタカシは必ず私にそのような言葉をかけてくれた。

しかしアイテールを倒し、外で待機していた輸送機に乗り込む今まで薄い笑顔を浮かべたままタカシは一言も言葉を発しなかった。無言で苦しそうな表情を浮かべる劉に

肩を貸し、小さな体で副支部長を担ぎ上げると、私を一目見てもと来た道に戻りだす。慌ててついていったがかける言葉はやはり見つからなかった。

今は翼はない。階段を登る途中で引つ込むようにタカシの体へ吸い込まれていった。しかし、背中の一部が破けたシャツはそこに翼があったのだと語りかけてくるようである。ろからついていっていった私はその寂しい背中を見つめることしかできなかつた。

「タカシ、あとで私の部屋へ……それからすまなかつた。前線で指揮を執らなければならぬはずの私が指揮をする余裕もなく力尽きてしまうとはな、そろそろ引退か」

「使うなどいわれていたのに使ってしまった……申し訳ありません副支部長……」

「よいのだ、それについては私の部屋で話そう。皆ご苦労だった、皆の働きに口だけではなく感謝している。たいした報酬もないがゆつくり休んでほしい。もうすでに休んでいる奴もいるがな」

副支部長の視線の先には椅子の背もたれに体を預け、上を向いたまま口をあけて寝ている劉の姿があつた。

「ありがとうございます、副支部長」

輸送機で交わされた言葉はそれだけだつた。

いつの間にか降り始めた雨が輸送機の窓をぬらし、そこに反射するタカシの顔と重なって涙のように見えた……

第九章 双生

雨に濡れた自室の窓を見ながらベッドに寝そべる。俺にはそれしかできなかつたし、たぶんそんな気分だつた。

俺を見た時のアリサの怯え、困惑に満ちた顔。あれはそう……

——化け物！

——こつちへ近づくな！

——汚らしい子供、忌むべき子供。生まれてくるべきではなかつたのだ。

過去の記憶がフラッシュバックし、無意識に頭を押さえる。

副支部長に言われたことを思い出す。

「お前のおかげで我々は助かつたが、私はお前を二重に傷つけてしまった。本当にすまない。」

使わざるを得なかつた。たとえリスクがあるとしても、アレを使わないと誰も助けられなかつた無力な自分が情けない。

短く息を吐き窓から目をそらす。

——もう眠ろう

そう思ったとき、部屋にノックの音が響き渡った。

「アリサです。お話があります」

開けるべきか少し迷ったが俺はゆつくりと立ち上がりドアへと向かった。

部屋の中に気配があるので、彼がいることは間違いない

ドアを開けてくれるかは賭けであるが私はまだ彼にお礼も言っていないしそれに……
謝りたい。

ゆつくりと動いた気配はドアで立ち止まり、バシユツと音を立てて私と彼を隔てていた壁がなくなる。

「あの……入っても……いいですか？」

絞り出すような声になってしまったが尋ねる。

「何もなければどうぞ」

スツと身を引く彼も少し緊張しているようでこちらの表情を見ないようにしている。

私は部屋に入るとまたバシユツと音を立ててドアが閉まる。唯一の光源だった廊下の明かりがなくなり、部屋は一瞬暗くなるがすぐにタカシが明かりをつけてくれた。

「暗くてごめんね、そこにあるベッドにでも座って」

タカシの指の先にはどの部屋にもある共通のベッドがあった。椅子もあるがどうや

ら椅子としてではなく荷物置きになっていようだ。

彼がベッドの隣に立っているのと言われたとおりにベッドに座る。心なしか人のぬくもりを感じた。

そのぬくもりに後押しされて口火を切る

「さつきは助けてくれたのにお礼も言えずごめんなさい。私……その……副支部長から理由を聞きました。」

「俺が化け物だつて?」

その言い草に思わずムツとする。

「そんなことは思いません!」

「ごめん、冗談……ブラックジョークだったね。副支部長からどこまで聞いてる?」

「あなたがアラガミと双子であったこと、そしてその関係かあなたはアラガミに変化できること。そしてその力を使いすぎると体がアラガミに飲み込まれてしまうことは聞きました」

「結構詳しく聞いたみたいだね。そう、俺はアラガミと一緒に体内で生まれた。俺の母親は人間だったのだけどアラガミの集団に襲われて気絶しているとを運よく通りがかりのゴッドイーターに救われた。吊り橋効果かな?俺の母親とそのゴッドイーターは恋に落ちて数週間後、母は妊娠した。双子だった片割れが俺、そしてもう一人が

……アラガミだった。」

一度口を閉じると彼は辛そうに眉を顰めそのあとの言葉を続ける。

「両親は俺たちを産まないという選択肢を選んだ。だけど誰にも予想できないことが起こった。お腹の中のアラガミの反応が消えたんだ。双子は一人になり両親は産むことを決意。そして俺が産まれた夜……父が任務で死んだ。アラガミに食われたらしい。そしてそのことで気を病んだ母は俺を研究機関に売り飛ばしその後薬物中毒で死んだと聞かされたよ。正直母親の顔は覚えていない。残ってるのは……」

彼はポケットからメガネを取り出した。そのメガネを見る彼の表情は胸が締め付けられる。

彼が時折見せる諦めたような表情は幼少期の出来事が関係しているのだろう、両親を亡くし、研究機関で独りぼっちの孤独の中ゴッドイーターとして育てられる……他人とは思えなかった。

彼の言葉は続く。

「研究機関での出来事だったんだ俺がアラガミに変化できたのは。薬物投与で暴走した俺は体の一部をあの時のようにシユウへ変化させた。それから先俺は化け物呼ばわりされて生きてきた。副支部長だけだよ俺を人間扱いしてくれたのは」

彼の人見知り、やさしさの理由が紐をほどくように理解できる気がした。

「だからね、アリサ。化け物である俺に近付いちやいけないんだ」

その一言で冷たい感情が沸き起こる。

「……どんびきです」

「……え……？」

「あなたはそうやって自分が不幸だと悲劇のヒロインぶって周りの気持ちも考えずに生きてきたんですか？生死を預ける仲間でしょうか？私たちは！裏切られたから誰も信じないってそういうつもりですか？」

タカシは豆鉄砲を食らった鳩のように目を丸くしているがさらに捲し立てる。

「私だって目の前で両親をアラガミに食べられてます！同情がほしいわけじゃありません！それで精神を病んであろうことか上司を狙撃しました。おかげでその上司はアラガミ化してその上司を止めるためにたくさんの人が傷つきました！でも前のリーダーは全部丸く収めて私に気にするなって言ってくれました。上司もです。意味わかりませんよね？全部私のせいなのに！要するにあなたが特殊な体質であっても大切な仲間だってことですよ！馬鹿にしないでください！そんなことであなただを嫌いになるわけないでしょう!？」

あとあと考えてみればかなり支離滅裂だったと思う。それでも彼に伝えたいすべてを伝えたように感じた。

タカシは少しの間下を向いていたが真下の床に滴が落ちる。

「俺は……君が……アリサが好きだから傷つけたくなって……」

途切れ途切れの言葉と嗚咽。私は思わず彼を抱きしめていた。

「私も……あなたが好きです。あなたを守りたい」

第十章 新星

やってしまった。

勢いとはいえまさかタカシとお付き合いするなんて思ってたなかつた。

そりゃあ好きだし、一緒にいたいと思ってるけれども……でも順序が……

自分のしたことに反省はあつても後悔はない。あの夜の出来事以来、私はタカシと付き合っている。周りには悟られないようにしているけれども副支部長だけはなんでもお見通しだとも言うように微笑んでくる。さらに大きなミツシヨンの後ということでは私たち「クルイロー」は休暇を与えられた。タカシを息子のようにかわいがっているとは聞いていたがこれでは職権乱用の親バカである。

などと考えていたら私の太ももを枕にして寝ているタカシが膝のほうに寝返りをうとうとするので落ちないようにこちらに引き寄せる。寝顔がまるで赤ちゃんのように愛くるしくてかわい、それを本人に言うとな怒るので内緒だが無防備にしかも昼間から中庭のベンチでこうしてタカシが寝ているそばで本を読むのも悪くないと思えてつい独り言がもれる。

「こうしていると平和だっておもっちゃうなあ」

「そうね、でも平和だと私たちの仕事がなくなってしまおうねー」

独り言に返事が返ってきたことに驚いて思わず立ち上がる。もちろんタカシが転げ落ちるがそれどころではなかった。

振り返るとそこにはつなぎを着てメガネをかけた白衣を羽織って立っていた。

「あなたがアリサでそこで転がってるのがタカシね？ 私は神機整備班のバネッサよ。兵器開発も兼ねて行ってるわあなたたちの潜入をサポートしたのは私」

「あ……あのミサイル……！」

教団の本拠地へ打ち込まれた高威力のミサイル。それはこの人の仕業だったのか驚きの連続でうまく言葉が出てこない。

「そうよ、あのミサイルは私の作ったもの。殺傷能力は抑えながら爆発は派手に、広範囲に炎が飛び散り火災を引き起こすってそんな兵器よ。そんなことよりあなたたち二人に呼び出しがかかっているわ。副支部長からね、私についてらっしゃい」

言うが早いかバネッサは踵を返して歩き出す。隣でタカシが立ち上がり寝ぼけ眼でこちらを見ているがひとまず謝罪は後でするとして歩き出したバネッサを追うようにタカシを連れて後を追う。

無意識にも手をつないでいたのでこのことで後々劉にからかわれることになった

……。

「連れてきたわよアレクサンドル」

「ここでは副支部長と呼ぶんだバネツサ神機特務仕官」

連れられてきたのは神機の保管庫で副支部長はそこにいた。そして珍しいことに……

「まあいいじゃないかアレクサンドル。かつてはチームメイトだったじゃろ」

恰幅のいい老人、しかし目には数々の戦いを乗り越えたであろう炎のように燃える色を宿している。この人こそこのロシア支部の支部長、ウラジーミル・マカロフ支部長だ。

「しかし支部長……部下に示しが……」

「硬い！硬すぎるぞアレクサンドル。わしはそこらを駆けずり回ってお疲れなんじゃぞ？すこーしくらいユーモアがないと羽が伸ばせんわい」

支部長はそう言つて肩をばきばきと鳴らすと私たちを見る。

「君たちだね？クルイローの若いエースは」

その迫力のある目に気圧されて思わず姿勢が正しくなる。

「独立遊撃部隊クルイロー所属、隊長のアリサ・イリーニチナ・アミエーラです！」

「同じくクルイローの小早川タカシです！」

二人そろつて敬礼をする。

「今回は二人に告げなくてはならないことがあつてのお、アレクサンドル説明を」

「はい、イワンの処罰が査問会で決まった。極秘任務であるにもかかわらず命令拒否、ならびに上官に対する不服従の罪で後方支援および防護班への移動が決まった」

通常ならばゴッドイーターとしての地位を剥奪されフェンリルを追放されても不思議ではなかったが彼の腕と上官……父親の顔を立てての前線ではなく後方支援で様子を見るといったところだろう。残念だがその処罰は最善策であるといえる。

「ついでにはイワンという欠員がクルイローに出てしまったため新しいメンバーをこちらで用意した。現在訓練が終わつて実戦も経験していないような者だが次のミツシヨンから同行させる。入りたまえ」

副支部長の声を待っていたかのように私の隣の扉が開き一人の少女が現れた。純白のブラウスにフリルのついたスカートで幼さを残した顔立ちだがツインテールがよく似合う印象だ。

少女は私たちの横を抜け、支部長の隣に並ぶ。

「エリザベス・トールキン君だ。彼女はすごいぞーわしも一目置いておる」

支部長の言うとおり彼女からは新人とは思えない空気を感ずる。

「この者がクルイローの新しいメンバーだ。次のミツシヨンはクアドリガの討伐、メンバー全員で策を練っておくように。解散！」

「リズでよろしいですね、先輩方がわたくしの足を引っ張らないことを祈っておりますわ」

初対面の印象は……最悪だった。

第十一章 戦車

白いもやのかかる朝方のキラキラと輝く美しい景色の中に似合わない異形の存在がポツンと一つある。もちろんそれはアラガミでありそいつの名は「クアドリガ」、四足歩行型のアラガミだがほかのアラガミとまったく異なる部分がある。

アラガミは捕食したモノを取り込んでいく性質があるため多くのアラガミは食物連鎖の頂点に君臨すべくどこか生物の面影がある。

しかしこのクアドリガに生物の面影はほとんど見られない。前足の部分はキャタピラを縦に立てたつくりであり、胸には分厚い装甲、顔の部分にはかろうじて生物の面影が残っているもののまるで骸骨でその周りはアンテナのようなものが張り出している。背中には他連装ミサイルがなんと二つもついており、胴、後ろ足も胸とまではないかないまでも銃弾を容易に通さない固そうなつくりである。

戦車型アラガミ。その冠に恥じない戦うために生まれてきたアラガミがそこにはいた。

神機でまずは脅威であるミサイルポッドを狙う。私の攻撃と同時に隠れていたチームが飛び出す手はずになっていいるのだが……

「何をやっているのでしょうか……」

クアドリガの後方に隠れているリズとタカシがなにやらハンドサインでやり取りをしている。

いや、もはやハンドサインではなくジエスチャーだ。声を出さないことはミッションへの最大限の配慮であろうか、二人とも感情むき出しで熱い議論を……アレはケンカですね……

ふと、劉が気になり反対側へ目をやると案の定神機によっかかり舟を漕いでいる。朝ですよ！

「攻撃を仕掛けます。集中してください」

不安になり無線を飛ばすとようやく緊張感が出てきたのだろうかみんなの目つきがかわ……

「劉！朝です！」

はつと顔を上げて両手で頭の上にもっていき大きな丸をつくる劉。大物ですね。

自分にも気合を入れなおして再び狙いを定める。悠然とゆつくり歩いていくその姿に第一射！

命中、さらにもう一撃も命中。クアドリガが振り向きその目が私を捉える。

「クアアアアアアア！」

突然の攻撃に怒りを示したのか雄叫びを上げてこちらへ突進してくるクアドリガ。そこにチームが挟撃を仕掛ける。

タカシのショートブレードが、リズのロングブレードが、劉のバスターブレードがクアドリガのミサイルポッドを捉える。

結合崩壊——神機によるオラクル細胞の結合を破壊することによって起こるその現象はアラガミを大きく弱体化させる部位破壊だ。破壊された細胞は再生することができずにその部位はまさに弱点と化す。クアドリガのミサイルポッドは再生不可能なほど傷ついた状態だ。

連続奇襲攻撃は成功といって言い出来だがクアドリガはまったくスピードを落とすことなく三人を跳ね飛ばし私のほうへと突っ込んでくる。

「さすが戦王と呼ばれるだけありますね……ですがっ！」

クアドリガの動きがいきなり止まる。クアドリガと私の間に仕掛けておいたホールドトラップにより麻痺状態になっているのだ。

ここぞとばかりに一斉に切りかかる。集団リンチのように見えて汚い方法と思うかもしれないがこれはれっきとした狩りの基本だ。罠を仕掛けて身動きが取れないうちに攻撃を仕掛けて一気にしとめる。なるべく損害を出さずに自分より大きな獲物を倒すことが出来るのは人間のこうした高い知能とそれを使いこなすための技術が必要な

のだ。

しかし、麻痺状態もそう長くは続かない。生物界の頂点に立つアラガミは毒や麻痺をも時間と共に克服してしまう。

麻痺状態から開放されたクアドリガはその巨体に似合わず大きく跳躍する。落ちてきたときの衝撃に供え神機に内蔵された盾を構えるが一人足りないことに気がついた。

「伊達に飛蝗と呼ばれてないんで……ね！」

クアドリガよりも高く飛び上がったタカシがクアドリガの顔面に刃をつきたてた！

それによってバランスを崩したクアドリガは着地の態勢もとれずに落下し再び大きな隙をつくる。

「今です！」

全員が横倒しになったクアドリガの顔面やミサイルポッドめがけて刃を繰り出していくと

「クアアア……」

短く一鳴きしてクアドリガは力尽きた。

このミッションの終了は同時に大きな陰謀の始まりであったことにこのとき私たちは誰も気づいてはいなかった。

第十二章 開幕

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

開けた大地に大音量のアラーム音が鳴り響く。

クアドリガの撃破に成功し帰還用のヘリコプターを待つ私たちに緊急通信が入ったようだ。

「緊急事態発生！緊急事態発生！周辺のゴッドイーターは直ちに帰還してください！繰り返します、周辺のゴッドイーターは直ちに帰還してください！」

通信の後ろからは慌てる職員の声、響くアラーム音。緊急事態という言葉の意味が十分すぎるほど伝わる様子だった。

「こちら遊撃部隊クルイロー。帰還ヘリの現在位置と状況の報告を求めます！」

「あ、アリスさん！帰還ヘリはあと五分もあれば到着できると思います。そちらで視認できる距離かと！」

通信器に耳を傾けながら空を見上げるとこちらに猛スピードで向かってくるヘリが確認できた。

「ヘリは確認できました、状況はどうなっているのです!？」

「少し前に巨大な偏食因子の反応をここロシア支部内で確認したのですが、確認に行つた人は一人も戻らず……研究中の偏食フィールド発生装置の誤作動かと思われたのですが周囲のアラガミが防壁を破り、内部への多数侵入が確認され現在はその対応で追われています。オペレーター総出で事に当たっていますが確認の取れないことも多く皆さんに正確な状況をお伝えできないのが現状です。門兵との連絡も取れないので町にも被害が出ている可能性があります至急ご帰還ください！」

「了解です！へりも着陸態勢に入つて……」

へりの音のなかに何かが飛んでくる音がする……

はつとへりのほうを見るのとほぼ同じタイミングで爆音と衝撃が襲い掛かる。

今まさに私たちを乗せるために着陸しようとしていたへりが炎上している……

そして周囲はいつの間にか大勢の人に囲まれている。その中にはRPGー7ーロシア製対戦車擲弾を持つている人もいる。犯人は明らかだ。

「穏やかな歓迎ではなさそうだねえ……」

低い声で劉が呟くと、へりを打ち落としたであろうマスクの男がフツと鼻で笑つた。

マントの下にのぞく見覚えのあるエンブレム……まさかこいつらは

「悪いがゴッドインターを行かせるわけにはいかねえんでな。ここでちよいと足止めを食つてもらうぜ。アンタたちには個人的な恨みもあるしな」

鋭く光る目には憎悪や怒りが込められている。やはりこいつらは……アラガミ神教徒！

へりを背にぐるつと囲まれ退路が確保できない、このままではロシア支部の救援は愚か自分たちの身も危ない。

「下手な動きはするなよ？ゴッドイーターってのはオラクル細胞の投与によつて身体能力が常人のそれを遥かに上回るんだつてなあ？人の子の分際で神の領域に踏み入ろうとするたあおこがましいにも程があんぞ？だが人の体に変わりはねえんだ。こいつで十分やれんדר？」

男は打ち終わったRPG—7を投げ捨て肩に担いでる銃に手を伸ばす。確かにこれだけの人数うに斉射されれば私たちも……

私の思考をさえぎるようにスツと一歩劉が前に出る。

「あんだ？聞こえなかったのかテメエ……？下がれ」

劉は男の言葉に耳を貸すことなく頭だけ振り向いてタカシを見た。

「タカシ、お前さんなら『飛べる』だろう？隊長とお譲ちゃんを連れていきな」

「あん？テメエが盾になって他を逃がそうつてか？こいつは笑え……」

「早く行け！いくらお前でもこの状況は全員は無理だ！」

劉の眼差しが鋭くタカシを射抜く。タカシは下を向いた後、意を決したように劉を見

返した。選択を迫られた有能な二人の部下のやり取りを隊長である私は命令も出来ずに唇をかむことしかできなかつた……

「劉、ごめん……」

タカシの背中から大きな翼が生える。

教徒は最初は驚いたがよく訓練されているようでタカシに銃を構える。それに構わず私を抱えるとアラガミ化するタカシをはじめて見て驚いたまま固まるリズを脚に挟み飛び上がる。

直後に発砲音が聞こえるがそれをすり抜け劉がリーダー格の男の銃を神機で破壊する。

「また明日……アル」

周りの景色と同じように劉と男たちの姿は流れていった。

第十三章 戯曲

「このわたくしがアラガミに！それも脚で扱われて飛んでいるですって!?!これほどの屈辱は受けたことがありますわ！」

突然の出来事の連続に頭がフリーズしていただのだろう。再起動がかかったリズムは捲くし立てるように声を荒げる。

タカシに連れられて飛び立ってからそう時間はたつてない。タカシがリズムに説明を始めたので私は眼下を見下ろした。

アラガミが草木をなぎ倒し、積もる雪すらも残らない密度でロシア支部へと行進している………

こいつらがロシア支部へたどり着いたらこの大群が通った後の大地のようにまっさらな荒野と化すことは火を見るよりも明らかであった。

オペレーター、購買のおばちゃん、下町の人々の笑顔……そのすべてが焼けたファイルムのように消えていく地獄絵図を私は頭から振り払ってキツと進路を見つめた。

アラガミが向かう遥か先にロシア支部が見える。こいつらがたどり着くまでになん

としても装置を止めなくては！

「タカシ、リズ。ケンカはナシです。全力でとめますよ！」

「了解!!」ですわ！」

不安を振り払いただ最善を尽くす。私たちはさらに加速した。

「ザックさん率いる第一部隊が下町で交戦中！多数の教団の進入で町は混乱しています！また、アリサさんたちクルイローがこちらに向かっています！」

「なんとしても耐えるんだ！今輸送隊を武装させて各部隊へ向かわせている！」

「第三、第六部隊の反応をロスト！これまでの通信から恐らく教団による妨害かと思われる！」

「踏ん張れ！ここで私たちが通信を統制、各班に状況を伝えることが戦局の打破につながる！」

オペレーターは八名。人手は潤ってきたとはいえ長いこと極東支部の傀儡であったロシア支部はまだまだ人手不足だ。現場指揮や情報関係に強いものが少なく、人手の半分以上が門兵や後方支援部隊に配属される。

作戦室でせわしなく動くオペレーターを見ながら副支部長アレクサンドルは苦虫を噛み潰した。

「サイラス、その調子でオペレーターの統括を頼む。避難民の受け入れが最優先だ、町を焼かれようと人がいれば立て直せる。後方支援部隊、門兵でもいい、戦えるものは私と内部に侵入した教団を退け装置の様子を見に行く」

指示を出しアレクサンドルは立ち上がった。そこにオペレーターの一人が告げる。

「副支部長、後方支援部隊の通信が途絶えました」

胸騒ぎを感じつつもアレクサンドルは通信室を後にした。

「アリサとリズは避難民の搜索をしながら支部へ、俺は第一部隊の加勢に行く。いいね？」

下町で私たちを下ろしたタカシが告げる。

「現状での最良の判断です。私はリズと行きますが死んだら許しませんからね」

「劉にもそれをいってやればよかったのに、行ってくる」

少し笑った（様な表情を見せた）シウウとなったタカシは道中のアラガミを翼と腕を使ってものすごい速さで蹴散らしながら角を曲がって見えなくなつた。

周りを見渡すと瓦礫、炎、死体……震える気持ちを抑えてリズの手を引き支部へと駆け出した。

道中の浮遊する天使のような球体のアラガミ「ザイゴート」を屠りながらリズはアリ

サの手を振り払う。

「弱者の扱いは辞めてくださる？わたくしだつてゴツドイーターですよ？」

唇を震わせながらも似合わない笑顔を浮かべるリス。

「ペースを上げますから逸れないでくださいね？」

「望むところですよ、遅すぎて野原をお散歩でもしているのかと思ひましたわ」

道中で襲われる人々を救出しながら私たちは支部を目指す。

刻一刻と迫るアラガミの大群の手に追いつかれないように、地獄を再現させないよう

に……

第十四章 転調

「状況はどうなっていますか？」

リズと道中で逃げ遅れた人を救出しシエルターまで無事にたどり着けたところでオペレーターに連絡を取る。

アラガミとそれを信奉するカルト教団の二つから同時に攻撃を受けている現状では情報の速さは対応までの早さにつながる重要な存在だ。

「居住区および門周辺のアラガミはシユウ科の新型アラガミによってほぼ掃討されました。アラガミ同士の共食いは珍しいことではありませんがここまで徹底的な光景は初めてだったと第一部隊からの報告です。信じられないことに新型は人間に対して敵意を持たないようですね……。そこでアリサさんとエリザベスさんには偏食フィールド発生装置の方へ向かってもらいます。先に向かった副支部長と連絡をとろうにもジャミングが酷くて連絡が取れません、激しい抵抗が予想されます。アリサさん、頼みます！」

偏食フィールド発生装置は敵側に落ちているだろう。

今ここはおいしいにおいが立ち込める肉をライオンの目の前で焼いている状態なの

だ。

「わかりました。アリサ、リズの両名直ちに装置へと向かいます！」

フェンリルロシア支部本部の南側に装置のある研究棟は建設されていた。

かつてはオオグルマ博士によって非人道的な実験が数多く行われたそこは、支持者でもあつた極東支部の旧支部長ヨハネス・フォン・シツクザールの死によつて研究機関は停止。

以後の研究はシツクザールの後任であるサカキ博士と共に革新的とも呼べる研究に着手していた。

それが偏食フィールド発生装置である。

この装置を使えばアラガミの偏食傾向を自在に操りロシア支部周辺だけでなくすべての人々に安心して安全な生活の実現させる可能性を秘めていた。

先ほどの例で例えるならば、ライオンに対して捕食対称でない雑草に変身するといったようなところか。それを今回は逆に使用することでアラガミを引き寄せているのだ。

それを止めに行くべく研究棟と本部をつなぐ唯一の連絡橋を渡っているのだが……

「酷い……」

戦争。

その言葉がふさわしいともいえる惨状だった。

一緒に町を守ってきた門兵や後方支援部隊が銃をその手にピクリとも動かず血を流して倒れている。

そしてそれはアラガミ神教徒とも共通していた。

急がないと……

走っていた足に更に力が入る。連絡橋を駆け抜け、死臭が漂うゲートをくぐり、研究施設の更に奥のその『装置』を目指す。

「……………!!」

奥の扉から聞き取れないが声が聞こえる！

扉を蹴破り入った部屋で私とリズの目の前に入ってきたもの

鮮血を吐き出す肩から腰への袈裟懸けの傷を刻まれ今まさに後ろへ倒れる副支部長。

その隣で返り血を浴びながらそれよりも大量の血がついている神機を手を持つ人物。

「なん……………で……………」

神機使いにしてアレクサンドル副支部長の息子イワンだった。

第十五章 分岐

「まだ生き残りがいたか」

敵意と怒りが渦巻くダークブルーの瞳が次はお前たちだと語りかけてくる。

来る！

本能が警鐘を鳴らし神機を構えた瞬間に衝撃が走る。

「ほう、いい反応だな」

「くっ………！」

すばやい斬撃に冷や汗を飛ばしながらも距離をとり、状況を確認………

ガギン！

重い音を響かせて再び衝突する神機達、経験が浅く状況の処理に頭が追いついていないリズを放置しイワンは私を狙って距離をつめる。思考をさせない怒涛の連続攻撃を受けながら距離をとる隙を探すも躊躇いや戸惑いのない刃は容赦なく肉薄する。

本来神機は人に向けるべきものではない、かつて私は人に向けてトリガーを引こうとしたがそのときも神機使いとしてのプライドかそれとも人間としての心かはわからないが、結局その人を穿つ事はできなかった。今でも痛い炎の記憶。

それでも迫り来るこの凶刃は躊躇いなど一切もない。目の前に立ちふさがるものを切捨て、屠り、喰らい、倒す。一撃一撃から感じる排斥の意思は私の心を締め上げる。

「隊長！」

声の主がイワンが一瞬ピクリと気をとられる。

——（こっ）！

左わき腹から股関節を通り左足先へ力を伝達させた渾身の回し蹴り！

「うお………！」

反動を逃すために弾け飛ぶようにしてお互いに距離をとる。

イワンは蹴りをもらった右脇を押さえながら忌々しげに私と声の主であるリズを見やった。

「リズ！副支部長を保護！手当てをお願いします！」

僅かな望みをかけて副支部長をリズに託す。

「あの男は終わりだ。そしてお前達も逃がさん」

殺気を含められた声、以前のイワンと別人のように憎しみでゆがむ顔

「なぜ………なぜですかイワン！私達はアラガミを倒すゴッドイーターでしょう!?
なのになぜ私達を、副支部長を裏切ったのですか!?!」

「親のいない貴様にはわかるはずがない！」

「わかりません！親としても人としても立派な副支部長を憎むその気持ちか！」

再び距離をつめようとするイワンに対し咄嗟に人体へのダメージの低い麻痺弾を連射して牽制する。端でリスが懸命に副支部長の手当てを行っている。なんとしても守り抜く！

「親として立派だと……？あの男が？笑わせるなアツツ！！！」

弾丸を避け、または弾き飛ばしながらイワンが接近する。

「病気の母を見捨て！仕事に邁進し！その仕事先で家族ごっこをする男が立派なものかア！！！」

すべての弾を防ぎきり、ありったけの叫びと共に真一文字になぎ払われる神機。

自分と母を捨てた父アレクサンドルへの憎しみ、そしてそのアレクサンドルが息子のように溺愛したタカシへの嫉妬。

でもそれは……

「副支部長が寝る間も惜しんでアラガミを討伐したのは奥さんのためです！副支部長はいつも言っていました。いい医者を招くためにここロシアを安定させると！」

イワンの攻撃を掻い潜り再び麻痺弾を連射する。足元を狙って動きの制限を凶った攻撃に再び距離をとるイワン。

「詭弁だ！苦しむ母のそばに居ることこそが父のすべきことだったのだ！」

「その機会すらあなたは奪ってしまったのです！その逆恨みにどれだけの人が巻き込まれたと思っっているのですか!!」

イワンの表情に曇りが差す。更に畳み掛けるように言葉をつないだ。

「ここに来るまでに大勢の人を見ました、傷だらけの人や家を失った人、そしてもう生きることの出来ない人たち……みんなあなたの個人的な恨みによつて何の罪もない大勢の命が失われています！教団にまで手を貸してこれがあなたのやりたかったことですか!？」

歯噛みをしながら私の言葉に動揺するイワンだが「それでも」とかぶりを振って前進する。

「あいつ………あいつ^{タカシ}さえいなければ!!」

反論できずに責任転嫁！恋人のためにも残されたとおきの切り札で決着をつける！

「副支部長はあなたのためにタカシを鍛えたんです！友達を作らないあなたのために！ライバルとして一緒に鍛えあえる存在としてタカシを選んだ。そしてタカシもあなたをライバルとして認めていた！そうでしょうタカシ!!!」

呼びかけにこたえるように壁を突き破つて私とイワンの間に入ってきた黒い翼。

——本当にあなたは一番きてほしいときに私の元へ現れてくれる

「大丈夫？アリス」

表情がないアラガミの姿であっても私には彼のいつもの微笑がはつきりとわかる。

力強く頷くと二人でイワンを見据える。驚愕の色を浮かべたイワンからは攻撃の意思が抜け落ちていた。

「タカシ．．．．．なのか．．．．．？」

「黙っていて悪かった．．．．．副支部長から口止めされていたんだ。この体のことも君に対する副支部長の思いのことも。」

「私に対する思いだと．．．．．？」

「そう、イワンは素直じゃないから友達が出来にくいこと。だから友達になってやってほしいってね。」

「私はそんなこと望んでいない！」

「俺は友達でありたいと思ってる！今だっというライバルだと思ってる。」

「フン、アラガミが私と友達と？」

「身寄りのない俺は君たち親子がうらやましかった．．．．．だからせめて友として弟子として君たち親子とかかわりたかったんだ！我がままなのはわかってる。でも君の孤独も！葛藤も全部わかってるつもりだ！一人だなんて思わないでくれイワン！一緒に帰ろう！」

ゆつくりとタカシが手を差し出す人は皆孤独と戦っている。どんな人間も一人では生きていけない……………

「アラガミがわかったような口を利くなあああああああああ!!!」

イワンがタカシに向かって走り出す

タカシは動かずじつと手を差し出している

斬られる!

銃を構えるが間に合わない!

刃が迫るあと数センチのところでイワンの動きが止まった

「なぜだろうな……………こんなに憎い相手なのに……………」

イワンの手から神機が滑り落ち大きな音を立てた。

「帰ろう、イワン」

タカシが神機を拾い上げイワンに渡すが……………

「一緒には帰れん」

イワンは神機を受け取ると踵を返しポケットから何かのリモコンを取り出しスイッチを押す。

——ズゴゴゴゴゴゴゴゴ……………

地鳴りが鳴り響き屋根が落ちてくる

「イワン！」

「爆破スイッチを起動させた。もうすぐここは崩れ落ちるぞ？早く脱出しろ」

「君も一緒に!!!」

「早くいかんと彼女達も巻き添えだ。私は覚悟を決めた。行け！」

「イワーーーーーッ!!!」

「さようならだ……ライバル兄弟」

イワンは神機を天井に向けて撃つ。

ガラガラと音を立てて落下した天井はあつという間にイワンを覆い隠した。

タカシは副支部長を脇に抱え私とリズを瓦礫から守りながら脱出した。

音を立てて崩れる研究棟を目に私達は一言も発することが出来なかった。

まるで墓石のように光を失った偏食フィールド発生装置が半壊のまま残っていた……

第十六章 傷跡

フエンリルロシア支部襲撃事件は終結した。

偏食フィールド発生装置の破壊により引き寄せられていたアラガミは我に返ったように四方へ散り、内部に残っていたアラガミは第一部隊と各地より戻ってきたゴツドイーターによって駆逐された。

リズの献身的な応急処置によって一命を取り留めた副支部長は息子の死を悲しむ暇もなく教団へ降伏を勧告。切り札であった偏食フィールド発生装置とスパイ件最大の戦力だったイワンを同時に失ったことにより教団側の首謀者がこれを受諾し、迅速かつ被害を抑えることに成功したが、その後すぐに再び意識を失い入院となったところに入れ違いで支部長が戻りロシア支部は統率を取り戻した。

タカシは連続かつ長時間のアラガミ化の影響でアラガミ化が急激に進行し、下半身が人間に戻らなくなってしまうため入院を余儀なくされた。

アラガミ化は禁止された。

リズは精神を病んでしまったようでも精神病院へこちらも入院。

無理もない、初めての实战で人間同士の争いに巻き込まれた上に瀕死の副支部長を自

分の命が狙われているにもかかわらず出来る限りの蘇生手段を使って治療したのだから。

劉は事件の次の日にひよっこり帰ってきた。

服は赤黒く染め上がり、右腕にもつ神機で松葉杖のように体を支えながらボロボロの靴に生える感覚のないであろう脚を引きずり、たくましかった左腕を口にくわえて、二度と光を見ることのない左目の代わりともいえるような強い光を右目で放っていた。

その後意識を失ったが今は病院で治療を受けている。失われた左腕はなんとかつながるようだが目のほうは絶望的らしい。

強い生への執着心が彼をここまで連れてきてくれたのだろう。

遊撃部隊クルイローで唯一動ける私は事件で隊長を失った第三部隊の代理隊長に任命され、彼らと共に事後処理に当たっている。

その間も私はタカシの病室に欠かさず見舞いに行ったが元気そうな彼とは裏腹にゆっくりとしかし着実にアラガミ化は進行していた。こつそり医者に聞いた話だと現場復帰はもう出来ないらしい……彼はまた私と戦うことを約束し、今日も元気に振舞っていた。

月日は流れ、リズは心のリハビリを兼ねて支部長の秘書に任命され、劉がちょうど体

のリハビリを始められるようになったころ、私が極東に帰る一週間前となり私に最後の任務が与えられた。

「ウロヴオロスですか……」

山のように巨大なアラガミ「ウロヴオロス」極東で戦ったことはあるがその威圧感を感じ出し思わず呟いた。

「そうじゃ、近頃目撃情報が増えてな。警戒にあたっていた偵察隊がつい先ほど眠っているウロヴオロスを発見したのじゃ」

支部長室の椅子に腰掛けているウラジール支部長がパソコンをこちらに回して差し出すと、その中には言われなければ山だと思いついてしまっただけになるほどじつと動かないウロヴオロスの姿があった。

「アリス君第三部隊を率いてちよちよいとやってくれんかね？寝ておる今がチャンスなのじゃ。最後の任務として不足はないじゃろ？」

「任せてください。必ず仕留めます！」

第三部隊とのチームワークは良好、なおかつウロヴオロスが寝ているとあれば迷うことなどなかった。

楽しそうに頷く支部長に頭を下げて支部長室を後にした。

「近くで見るとやはり大きいですね……」

体中にコケをはやした大きなアラガミ「ウロヴオロス」は寝息を立てることもなく背中を上にして丸くなっている。

「ベータ、狙撃位置につきました」

「デルタ、同じく狙撃位置に到着」

手筈どおりに狙撃手がポイントに到着したようだ。

「了解しました。あとはガンマ起こしてください」

位置についてのバスターブレード使いの体が輝き、全エネルギーが剣へを注がれて大きく肥大化する！バスターブレード使いの大技「チャージクラッシュ」隙が大きい変わりに絶大な威力を誇る一撃をウロヴオロスへと浴びせかける！

——ズガアアン！

「攻撃開始!!」

驚いて体を起こしたウロヴオロスの弱点である複眼のある顔面目掛けて狙撃手が連続攻撃を浴びせかける。

嫌がるようにウロヴオロスは顔を背けるがそこに私がアサルトで追い討ちをかける
と見る見るうちに顔の複眼が輝きだしついには体までもうっすらと発光する。

——ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

地響きを思わせるような咆哮、どうやら活性化したようだ。

活性化するとウロヴオロスの肉質は変化し銃での攻撃は効果が薄くなる。

ここからが小細工なしの真剣勝負！

しかしウロヴオロスは目の前に迫っているのにもかかわらず隊員たちは上を見上げている。

「皆さん何をしてるんですか！来ます．．．．よ．．．．」

隊員たちの視線を追っていくうちにどんどん言葉が尻すぼみになっていく。

上空に浮かぶ二つの影。圧倒的なスケールに思考がとまりそうになる。

絶望の具現化、目にしたものはウロヴオロスとウロヴオロス。

「い、こんな．．．．」

地に降り立った二つの山はもとあった山と並びまさに山脈となった。

——いやな予感がする！

タカシはベッドから飛び起きて病室から空を見る。

明らかに異質な大きな三つの物体がここからでも十分確認できた。

——アリスはウロヴオロスを討伐するといっていた．．．．でも三体は無理だ！
思わず病室を飛び出し神機の格納庫へと向かう。

「やめるんだタカシ君！これ以上無理をすると人間に戻れなくなるぞ!!!」

後ろで医者の声がする。

自分はいつでも化け物だつた。

その化け物をこロシア支部こは受け入れてくれて、アリサが自分を必要としてくれた。

もう迷うことはない！

異常に気づいて格納庫の隔壁が降りてくるがアラガミの足ほど早くはない。

タカシは神機を掴むと、隔壁をこじ開けてロシア支部を見上げた。

その後かぶりを振ると暗くおぞましい空へ向けて翼を広げた。

「ぐっ!!!」

ウロヴオロスの太い腕によるなぎ払うような攻撃によりガードをしてても壁に叩きつけられる。

戦場はまさに地獄絵図、ガンマは触手攻撃を受け続けて全身傷だらけ、デルタは光線に焼かれて蹲り、ベータは先ほど踏みつけられてからピクリとも動かない。

ついにガンマが跳ね飛ばされて壁面に打ち付けられると三対のウロヴオロスは次の獲物を見定めるように私を見る。

こんなところで……こんなところで！

ふらつきながら剣を構えるも脚が言うことを聞いてくれない。

三体同時に複眼が光りだした。光線の合図だが避ける気力も残っていない。

——せめて心は屈しない！

思いつきりウロヴオロスを睨みつけて剣を構えて前へ一步踏み出したとき。

光線を発射しようとした一番右のウロヴオロスの顔がはじけとぶように左へ向けた。

当然発射される光線はとなりのウロヴオロスに当たり……

——ウヴオオオオ！

弱点の複眼へ味方からの攻撃を受けたウロヴオロスは更に左にいたもう一体を巻き込み転倒した。

よく見ると右のウロヴオロスの顔に何かがある！あれは……！

「来てくれたんですね……」

最愛の人の姿がそこにあつた。同時にもう彼が人間に戻れないことを知り夢であることを祈るが肌を焼くようなヒリつく空気が現実であることを思い知らせる。

「アリ……サ！逃げ……口……！」

微かに残る彼の声に突き動かされガンマの元へとたどり着く

「動けますか？」

「何とか……」

辛い骨はやられていないようだが苦しそうだ。一刻も早くここから離れないといけない。

「ベータとデルタを回収します。辛いですがここが正念場です！彼らを救い出します」
ガンマは強く頷くとデルタを回収するべく足を引きずりながら壁伝いに移動を始めた。

すばやいバツタのような動きに翻弄されて三体のウロヴオロス絡み合うように何度も転倒する。その間をすり抜けてベータの回収を急ぐ。

「ベータ！立てますか？」

返事がなく、かなり状態は悪そうだ。

担ぎ上げるだけの力は残ってなく、引きずるようにして現場の離脱を試みる。

何度もウロヴオロスに踏まれそうになるがそのたびにタカシは注意をそらしてすんでのところ踏まれないようにしてくれた。

自らの体が傷ついて体からオラクルが溢れ出しても彼は飛ぶことをやめない。

私がウロヴオロスから遠ざかったとき、三体いたウロヴオロスは一体動かなくなっていた。

「ガンマ、救助要請を本部に送りました……これで……よかったですね？アルファ」

デルタを回収したガンマが満身創痍になりながら報告する。

「よくやってくれましたガンマ。私も限界のようです……」

限界を超えた体は言うことを聞かずにタカシの姿を捉えていた眼は目蓋の裏へと隠された……

私が目覚めたのは病院で、何もかもがすべて終わった後だった。

ガンマは私が気絶した後もみんなを守るように気を保ち、救助ヘリが来るまで必死に耐えてくれていたようだ。幸い第三部隊は誰一人としてかけることなく無事に生還してきた。もつとも復帰には数ヶ月かかりそうだがタカシが来なかったらやられていただろう……

それからタカシは私が極東へ帰る日になっても戻ってこなかった。

最終章 再見

「アリサさん到着しました」

「ありがとうございます。お疲れ様でした」

様々な思いを抱える地フェンリルロシア支部にファルコムは到着した。

前と同じ雪景色は凍りつくような空気を肺の中に送り込む。

再び自分は戻ってきたのだ愛する人にまた会うために。

「変わらないようだねアリサ君」

「そちらもお変わりなくアレクサンドル副……いえ支部長」

この四年間で前支部長は退任、アレクサンドル副支部長は支部長になっていることは耳に入っていた。

「そんなことはないさ、私も歳をとったよ」

「リズや劉は元気ですか？」

極東に戻っても二人のことが気がかりだった。リズは原職不帰を果たしたそうだが劉については聞いていない。

「いろいろ聞きたいこともあるだろう、長くなるから中へ入りなさい」

「そうですね、またここでオウガテイルに襲われても彼はいませんから……」
チクリと胸の奥で鋭く痛みが走るが、アレクサンドル支部長に連れられてロシア支部の重たいゲートを再びぐぐった。

ロシア支部の談話室。暖かい空間に数人が集まりアリサを出迎えた。挨拶などが終わると支部長が口を開く。

「アリサ君、今は任務に出ているがリズは元気だ、明日にでも戻るだろう。しかし劉は……」

「やはり復帰は難しかったですか？」

「そうだな……今は一線を引いて……」

「ご飯が出来たアルー食べるアルー」

支部長の説明途中にすつきょんとうに明るい声と共に扉の置くから劉が現れた。

「劉！元氣そうですね！」

「おかげさまアル隊長さん。今ではここのチューボーを任されているアルよ。ロシア人味付け濃いね、私は体が温まる料理研究中ヨ。チャーハン食べるアル！」

どんと目の前に置かれた器の中にはチャーハンが山盛りで入っている。ほんの少し生姜が入っているのだろうかいいにおいがする。

「ありがとうございます！いただきますね」

機内から軽いものしか食べていなかった。この出迎えはありがたい。

私がお食べている間にみんなは解散し、支部長と劉が簡単にこれまでの経緯など説明してくれたがチャーハンに夢中で半分くらい聞き流していたのは内緒だ。

「ふう、ご馳走様でした」

「お粗末！アルね」

「はやいな……さて、では本題に入るぞ」

新種のアラガミの目撃情報、サカキ博士に頼まれた任務を思い出す。

支部長はモニターに映像を映し出す。

四本腕のシユウ種がアラガミ四体を相手にそれぞれの腕を使って攻撃しているようだ。その腕の一本には神機と思われる武器が握られている。

「コードネームは『カンウ』と名づけられたがあれは……」

「タカシですね？」

思わず呟いた。あの神機、そして腕輪はまさしく彼のもの。

「その通りだ。このカンウは人を決して襲わない、アラガミのみを捕食対象として動いている。そのカンウを最近このロシア支部周辺で見かけるようになった。そこで、アリサ」

支部長はまっすぐ私の目を見る。

「君の任務はカンウの調査および接触だ」

「討伐ではないのですか？」

本来アラガミとなつてしまつたものは仲間であろうと始末する。それがフェンリルのやり方だつたはずだが今回の任務は討伐ではなく接触？

「そうだ。本来ならば情けは無用というところだが人を襲わないアラガミなどイレギュラー中のイレギュラーだ。うまくいけば懐柔して大きな戦力に出来るかもしれないと上は考えているらしい」

「そんな……」

それじゃあまたタカシは実験動物のように利用されるだけ……

「アリサ、アラガミが少なくなつたこのロシア支部周辺にあいつが現れたのは何か伝えたいことがあるのではないかと私は見ている」

「なにか……ですか？」

「それが何かかはわからん。だがお前が適任だと思ひサカキ博士に連絡したのだ。あいつは私たちの仲間だ。上に利用などさせん」

「それじゃあ……」

「あいつに伝言だ。『自由に飛べ』とな」

少し寂しそつだがやわらかい笑顔を支部長は浮かべた。

翌日、目撃情報を元に私は崖を下っていた。

一応極秘扱いであるため護衛はなく、移動用の車はあるが崖では使い物にならないため上に止めてきた。

落ちないようにゆっくりと慎重に崖を降りてゆく、ロシア支部のアラガミは減少したと聞いたが下のほうからアラガミのうなり声が聞こえるため注意している。

この高さでは満足に戦えない上に落ちたら一巻の終わり……
そんなことを考えながら下っていると下のほうから風を切るような音が聞こえる。

——まさかコンゴウが私を狙って……!?

思わず下を見たそのときものすごいスピードで上がってくる影が見えた。

それだけじゃないそいつは飛んでいて腕が「四本」ある!

とつさに脚に飛びついたが間違いない!これはタカシだ!

「タカシ!!」

カンウはそのまま一気に崖の上に出て脚にしがみつく私をつまみ上げ少し遠いところにおいた。

やっと会えた!言いたいことはたくさんあるがまずいわなければならぬことがある。

「あの時はありがとう！あなたがいなくなかったら私はここにすることができませんでした……それからごめんさい、あなたをこんな姿にしてしまつて……」

カンウは目を細め（たように見えた）翼ではない腕で私の頭の上に手を置いた。私の言っていることは伝わっているだろう、しかし彼は言葉を発しない。

「しゃべれないの……？」

——クウア……

カンウは悲しそうに一鳴きすると体の一部からあるものを取り出した。

「……これは！」

彼が取り出したのはメガネ、捨てられてなおも大切に持ち続けた母親のメガネ。アラガミになつてなおも彼はこのメガネを持つていたのだ。

——人間だったときの記憶を忘れないため……

そう彼が言つているように思った。

「私は忘れません、タカシと出会い生きてきたこの毎日を！」

彼は満足そうに頷くと腕についている腕輪を外して渡してきた。

そして後ろを向くと大きく翼を広げる。

「支部長が！自由に飛べと言つてました！タカシ！愛しています！」

目から零れ落ちる涙を止める事ができずに私は彼の背中へ思い切り叫んだ。

彼も私もわかつている、アラガミになってしまった彼と私の糸は再び交わることはないのだと……

カンウは苦しそうな咆哮と一緒に大空へ向けて飛び立っていった。

私は車に戻って彼との思い出を懐かしむように腕輪を眺め、あることに気がついた。内側に何か彫つてある？ 腕輪をひっくり返してそれを見る。

——アリスへ、これはアラガミになつてから書きました。だんだん文字の書き方も忘れてきてしまっていますがアリスの活躍も空から見えていました。とつても誇らしくうれしく思ってます。一緒にアラガミのいない世界を目指してがんばろうね愛しています——

腕輪のスペースを目いっぱい使った最後の彼のメッセージ。

私は涙を拭うと車のエンジンをかける、休んでなんかいられない。

彼の目指す世界のためにも一匹でも多く一日でも早くアラガミを駆逐しなければ！

私と共に彼もまたどこかで戦っているのだから！

景気よく元気よく車は走り出した。

——これが私の愛の記憶　アリス・イリーニチナ・アミエーラ